# 教育の場としての明治大学図書館


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学図書館<br>公開日: 2010-03-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉田, 正彦<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/7289 |

－巻頭言－

# 教育の場としての明治大学図書館

吉田　正彦*

在学生の父親から話し掛けられた。素晴らしいですね、驚きました、と。父母会の折に中央図書館を見学したのだという。こうした感想の多くは、図書館の斬新な、そして何よりも外光を充分に採り込む明るい建物への率直な気持ちの表現としてはしばしば耳にしてきた。だがこの時は違っていた。「図書館を見学していたら、息子に会ったのです。何人掛けかの大きな机に何冊も本を置いて勉強していたんです。息子も私に気がついて、何だ、おやじ、こんなところに居て、ということになったのです」と。こう話す父親の誇らし気な笑顔は今もって忘れることができない。

実は図書館で学生に出会って嬉しくなるのは父親ばかりでない、私たち教職員も同じである。実際にそうした場面に出くわした者の実感であろう。

図書館で学生に会うことを期待して、授業で課題を出すことだってあるかも知れない。だが同時に不安もある。課題を解決する鍵を図書館で見つけることができるだろうか。そもそもその「鍵」に辿り着く手段として、図書館に行くことを思い付くだろうか、と。その訳は自分の学生時代を思い出して頂けばよい。何かを調べるには先ず図書館に行かざるを得ず、図書館ではカードをめくって、それと思しい書籍を、タイトルかあるいは著者名で探すしかなかった。書庫に入る機会さえなかった。だが今日では事

*よしだ・まさひこ／明治大学図書館長／文学部教授／ドイツ文学、ドイツ文化史

情が違う。インターネットを駆使することで、図書館をつかわずに情報を入手することだってできる。図書館に行かずに図書館の蔵書を確認することができるし、キーワードで参考文献を探すことだってできる。課題を解決する手段が、多様化したのである。

だが有り余る程の情報の海の中で、学生のみならず私たちも、本当に必要な情報を、それも適切に得ることができているのだろうか。この問題を念頭に置きながら、図書館がこれまでに様々の提案をしてきたことはご存知のことと思う。とりわけ学生諸君に向けては—教員や職員の協力を仰ぎながら—授業に結び付く図書館の利用を提案し、実行に移してきた。それはとりもなおさず「大学における教育と図書館との関係」を、明治大学図書館が自ら問い直す絶好の機会であったと思っている。大学図書館に課せられた、最も今日的な課題のひとつでもある。学生を対象にした本学図書館の提案を、今改めて確認しておこう。

先ず「図書館活用法」である。学部間共通総合講座として全学部の学生を対象に、体系的な図書館利用のノウハウと情報リテラシー教育とを組合せて行う点に特色がある。半期2単位科目として教員と図書館の職員が専門に応じて協働し、講義と実習を担当する。その内容は多彩である。因みに今年度の和泉校舎のシラバスをご覧いただきたい。「大学図書館への招待」に始まり、本学図書館の施設と蔵書の特色・サービス、本学に縁のある作家の著作を中心に収集した和泉図書館所蔵の「日本近代文学文庫」をテーマにする時間もある。インターネット講習に対しては、レファレンスブックの種類や特徴とその利用法を考える「図書による情報の探し方」がある。そして実習「図書情報の探し方」と「新聞・雑誌情報の探し方」。その翌週には雑誌の編集者による「書物の楽しみ」。そして改めて「インターネット情報の探し方」と、設定したテーマに沿った図書などの資料の探し方を、小人数編成の実習授業により実体験。また授業一般に直接結び付く論文やレポートの書き方に関連して資料の引用、最終回は資料の利用と著作権との関りと、図書館に一歩足を踏み入れるところから、図書館の蔵書やインターネットによる資料の検索収集の方法、レポートや論文でのそれらの利用法と著作権保護への認識喚起、大学生として必要な図書館利用の知識を、授業を通して提供している。授業の一部は、現在6つのデジ

タルコンテンツを作製、ホームページでも公開しており、学生のみならず、教職員諸氏も是非覗いて見ていただきたい。ご批評頂ければ幸いである。

図書館主体の授業「図書館活用法」とは別に、専門・教養を問わず授業の補助として図書館がサポートするのが「ゼミツアー」を始めとする図書館ツアーである。2000年の「図書館活用法」開講を機に、科目担当教員が意図する教育内容に応じてオプショナルメニューを組み、場合によっては図書館員が出前授業もする。また、授業以外に学生の希望に合せて企画されるグループガイダンスも大歓迎、大いに利用して頂きたいものである。

図書館からのこうした取り組みとその成果が認められ本学が文部科学省に申請したプログラム『教育の場』としての図書館の積極的活用が、特色ある大学教育プログラムに採択された。2007年度から4年間のプログラムである。その初年度を締めくくるワークショップがつい数日前に開催され、学内外から約150名の参加があった。本学のこの取り組みにかくも多くの方が関心を持ってくださり、大いに意を強くした次第である。招待講師の基調講演や図書館活用法の科目担当者による課題の指摘もさることながら、授業の一環として図書館ゼミツアーを試みた教員の報告、特に活用法の授業やツアーに参した学生諸君の感想には参会者の多くが耳をそばだてていた。自らを図書館に通ううちに読書の楽しみを知ってしまったひとりの少女と語る1年生もいたからである。

今後も多くの教職員諸氏学生諸君がこのプログラムに進んで参加し、また図書館を覗いてくださるよう期待する次第である。本学では図書館職員が総出で図書館活用法とゼミツアーに関わっている。これが大きな特色であろう。だが、多くの教員、学生の参加があってこその特色でもある。